

Information & News

Information

乳幼児の五感、人とのかかわりを育てるPCソフト開発

杉並区立こども発達センター、女子美術大学、(株)キャドセンターが、平成16年から取り組んでいる「レインボープロジェクト」。このプロジェクトでは、マルチメディアの特長を活用し、障がいのある子ども（知的障がい・肢体不自由・発達障がいなど）の発達支援を行うソフトウェアおよびハードウェアの開発を行っています。

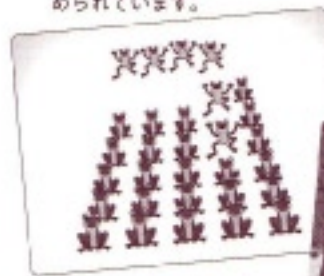
「反応を繰り返す楽しむ」段階から、「物を介して、大人や友だちとの関係を広げていく」段階への発達支援をテーマとし、以下のような点をねらいとしています。

- 高感度タッチ式ディスプレイの使用により、操作が簡単
- 失敗がなく、自己効力感が得られやすい
- 因果関係がわかりやすい
- 他者とのコミュニケーション意欲が高められる

こうして、プロジェクトで完成したソフトウェアが、発達年齢1歳児からを対象とした、『たっちゃんのコネク島』。発達センターは、豊富な臨床経験から子どもの発達・療育の専門的視点を押さえた企画立案を行い、女子美術大学の学生は、自由な感性でソフト画面の映像デザイン・音響を担当。そして(株)キャドセンターが、技術協力のサポートを行うといったチームワークで制作しました。

「触ると動く、音がする」色鮮やかな世界観が、「もっと触ってみたい」といった、物への関心を高めます。また、大きな画面を保護者などだれかと共有することで、「きれいだね」「わたしはこっちを触るから、あなたはこっちを同時に触ってみて」などのやりとりを促します。

白百合女子大学の妻野悦子教授は、「心身に障がいのある子どもの発達支援には、他者とのコミュニケーションを育てることがその基本となる。また、視覚・触覚・聴覚といった五感に訴えかける方法が有効であり、マルチメディアの特長を十分活用したコミュニケーション支援システムの、療育や教育への期待と可能性は大きい」と、現在、杉並区立こども発達センターと共同でソフト活用に向けて研究しています。子どもの他者とのかかわりがどう変化するか、また、より子どもの力を引き出すために大人はどうかかわったらよいかなど、観察・分析が進められています。



カエルに触れると、顔や手足も一緒に飛び跳ねる。画像をなぞると、ウェーブして連続跳びをやる。

クマの体の各部位を触ると、いろいろなくまの姿を見せる。かかわりが少ないと、退屈してうたごえする。



- 「たっちゃんのコネク島」についてのお問い合わせは……
(株)キャドセンター内 レインボープロジェクト担当
TEL : 03-5842-7302 email : rainbow@cadceneter.co.jp